

若いチカラが 町を盛り返す

宮城県登米市 とよま町の青年団 羽波芭酒場

不安と諦めの中から光を見い出す
人口減少・高齢化を危惧する
みやぎの明治村

宮城県県北に位置し、登米伊達氏の城下町として繁栄した「みやぎの明治村」と呼ばれる登米市登米町。同じ漢字なのに、市と町で読み方が違うという珍しい土地である。南北に流れる北上川、東京駅舎の屋根に使用されたスレートの産地、NHK朝の連続ドラマ『おかえりモネ』でも紹介された豊かな森林資源、東西に広がる田園風景、商家の歴史的な建造物が多く残る蔵通り商店街など、観光の町としても知られる「歴史・文化・伝統」の町である。

350年続く秋まつりや伝統の盆おどり大会、風あげ大会、県内外から多数の選手が参加するカップパーハーフマラソンなども、この町の名物として長年住民に親しまれてきた。

そんな美しい町も世の少子高齢化、過疎化の波にもまれ、コミュニティの存続が危ぶまれて久しい。長年続いてきた事業、伝統行事も参加者だけでなく運営する担い手不足は顕著で、町の人たちは「若者がいない」と口をそろえる。



多様な世代が集まった竹灯りづくりワークショップ 完成した作品を手に記念撮影。夏まつりでは前夜祭や盆おどり大会会場で飾られて好評でした

令和になり、コロナ禍が襲来。公民館事業や町の伝統行事は中止が相次ぎ、コミュニティ活動は停滞。住民の閉塞感は打開策が見えないままであった。やがて、コロナが収まり住民が待ち望んだ体育大会や盆おどり大会が復活。新しく着任した集落支援員や公民館長、刷新された会長他の役員が積極的に関わりを持つことで住民の意識も徐々に変化し、市内でも特異な38もの行政区があり、3つのコミュニティに分かれていた複雑な構造の町を一本化する動きが加

告知用フライヤー イラスト

bababaBAR開催に向け、フライヤー用の挿絵を町内在住のイラストレーター、吉原かおりさんに描いていただきました。イベント等開催時の告知、SNSなどで活用しています。



コミュニティ 公式ロゴ

制作はとよま町にゆかりがあり、墨絵師として活躍中の小山康博さん。書とイラストが融合されたデザインでスローガンの「One for all All for one」～1人はみんなのために みんなは1つの目のために～を表現しています。

毎月第3水曜日夜の 語る場所

2024年2月からスタートした会は、時として公民館の閉館時間を越えても「とよま愛」を語り合っています。5年後、10年後の未来を語ることでその夢を実現させてくれる若者に期待しています。



地域づくりの アイデアも

とよま地域づくり計画策定に関係するアンケートが配られ、これまでの5カ年計画の見直しと検証、地域づくりのアイデアなども話し合われてきました。住んでいるからこそその若者の意見が飛び交う場となっています。



bababaBAR 羽波芭酒場



水曜日は夜ふかし
若者がいないと言われ続けた町で声を掛けたら50人を超える仲間が集まりました。
震災後の町づくりの先進地、女川町に習い「60代は手をさす。70代は口出さず」を合言葉に「自称青年」が毎月第3水曜日の夜に飲みながら語る場所として「羽波芭酒場」bababaBAR(ばばばバー)を開催しています。
とよま町の方で聞いたときに使う「ばばば」にかけて、羽と波と松尾芭蕉の芭の文字を当てたこのネーミング。
自称青年であれば地域を開かず参加可能。関心ある方、お気軽に参加ください。とよまを愛し盛り上げたいという仲間が「ひとつの目的・ミッション」実現のために集い、立ち上げたサポーター青年団です。

bababaBAR MENU

とよま応援サポーター青年団 水曜日は夜ふかし 羽波芭酒場 bababaBAR / ばばばバー
市内外から自称青年が集結。男女半々、移住者・よそものが多いのも特徴です

速。粘り強い取り組みの末、組織改編が実を結び、翌令和7年度より「第三次とよま地域づくり5カ年計画」がスタート。スローガンは「とよままで育てたい 暮らしたい 帰りたい みんなで未来へ」。

伝統と郷土を愛する心を繋ぐ 羽波芭酒場・青年団活動スタート

計画の策定には「とよま応援サポーター青年団」が関わった。スタートは令和6年2月。高齢化が進み、若い人がいないと言われ続けた町に、昔のような青年団を作れたら活気が戻るのではと、移住者の公民館長が声をかけたのがきっかけ。復興のまちづくりの先進地・女川町にならい「60代は口出さず・70代は手を出さず」をモットーに「自称青年」を募集したところ、第1回目の交流会

に30数名が集まった。内訳は男女半々、市外からの移住者も半分近く占めるといふメンバー構成が期待と注目を集めている。町を作ってきた先人たちへのリスペクトは忘れず、若い世代がこの町を変えていきたいと意気込む。

名称は公募により「水曜日は夜ふかし羽波芭酒場 bababaBAR / ばばばバー」とした。由来は、毎月1回第3水曜日の夜に定期開催していることと、登米町の方言である驚いた時に発する「ばばばー」に町ゆかりの漢字をあてはめ「酒場・BAR」を加えたことによるもの。飲み物は各自持参がルールで、アルコールもOK。商店街が衰退し、夜に開いている飲食店がない町で、時には閉館時間を過ぎても、公民館長立会いの下、夜が更けるまで「とよま愛」を熱く語り合い、過疎高齢化の町を盛り上げようとする熱意とこれまでにない斬新なアイデアがまちづくりに生かされている。

若い人たちが未来を創る 竹のあかり製作など 新しい企画が次々と

羽波芭酒場のメンバーから出た企画・竹灯りづくりワークショップには、小学1年

曜日の夜に定期開催していることと、登米町の方言である驚いた時に発する「ばばばー」に町ゆかりの漢字をあてはめ「酒場・BAR」を加えたことによるもの。飲み物は各自持参がルールで、アルコールもOK。商店街が衰退し、夜に開いている飲食店がない町で、時には閉館時間を過ぎても、公民館長立会いの下、夜が更けるまで「とよま愛」を熱く語り合い、過疎高齢化の町を盛り上げようとする熱意とこれまでにない斬新なアイデアがまちづくりに生かされている。

竹のあかりをつくろう

8月2日(土)

午前部 11:00～12:00
午後部 14:00～15:00

会場 盆おどり緑日ブース
参加費 100円 LEDライト付

主催・とよまコミュニティ運営協議会 青年団
(羽波芭酒場ばばばバー)

参加を呼び掛けるPRチラシ
優しいキャンドルの灯りに癒されます。



枝垂桜の名所をライトアップし竹灯りを設置
町の新たな風物詩となり、観光客増加にも期待が高まります



竹灯り製作ワークショップ開催。小さな子どもでも簡単に作ることができ、世界でたったひとつの竹灯りが完成。ものづくりの楽しさを実感できます

生から70代まで全ての世代、22名が参加し、楽しい世代間交流の場となった。本年4月、作った灯りを市指定天然記念物(植物)のシダレザクラがある町の名所、清野家住宅に一夜限りで展示した夜桜鑑賞会は、事前告知がなく急遽実施が決まったにも関わらず、SNSを見た人たちが集まり喜ばれた。地区のミニデ行事でも竹灯りづくりが2年連続で開催され、多くの住民が参加した。みやぎ北上商工会青年部主催の夏まつり会場でも竹灯りづくりのブースが設けられ、青年団メンバーが講師になり、多くの老若男女が世界で一つだけの灯りを作って持ち帰った。ワークショップは順番待ちの列ができるなど好評で、同日夜の盆おどり大会では会場入り口に設置された。今後は、お盆の迎え火はじめ、秋まつりや年末のイルミネーションとしても定着し、町の新たな風物詩となるよう広めていきたいと考えている。

また、青年団では市制20周年を記念するイベントを発売し、実行委員会を立ち上げ助成金に応募したところ、NHK朝の連続ドラマ「おかえりモネ」をオマージュした音楽フェスティバル開催という企画が優れているとして、申請した市内の数ある団体の中から「登米なないろフェスティバル」が採



羽波芭酒場交流会 関西出身の館長が本場のたこ焼きワークショップを開催。親子の参加者もあり盛り上がりました

択された。メインステージは地元出身シンガーほかの音楽ライブ、地元産品を生かしたワークショップやキッチンカー・飲食店の出店、中高生ボランティアがスタッフとして参画、登米町の伝統風PRブース設置、巨大壁画製作など楽しみな企画がいっぱい。来年1月25日、900人を収容できる祝祭劇場での開催に向け準備が始まった。実行委員長の柴田道文氏は「若い仲間が結集し、音楽の力で登米を盛り上げたい」と話す。

人と人をつなぐ公民館 市域を超えた連携で町が元気に

今年度は気仙沼市立松岩公民館との地域づくり交流事業「おかえりモネ・トリビュート」をスタートさせた。NHK連続ドラマでもお互いがロケ地どうしという繋がりが生まれ実現した企画で、市域を超えた連携は、全国的に見て珍しいこともあり、登米市が市制20周年を迎え、再び「おかえりモネ」が



戦隊ヒーローや恐竜の着ぐるみが登場
中学生や若者のボランティアが仮装して市民体育大会に参加

観光と賑わい創出に注目を浴びていることから、期待されている事業である。

多様な世代が協働 地域の活性化を継続し進み続ける

町内には遊具のある公園がないため、公民館の大集会室を「子どもたち・親子が安心して遊べる居場所・遊び場」として開放。羽波芭酒場メンバーが代表を務める市内の団体に協力を呼びかけサブカルの聖地として、サバイバルゲームやeスポーツが楽しめる屋内型公園として事業化することも決定。コミュニティ役員有志がボランティアで除草や樹木の伐採を行った駐車場に、ベンチを設置するなど環境整備が進んでおり、若い世代に触発された町の先輩たちが協力を惜しまないという好循環が生まれている。

One for all All for oneを 合言葉に始める 新しいまちづくりとひとおこし

コミュニティのスローガン「One for all All for one」一人はみんなのために みんなは一つの目的のために」を実感できる「明るく元気な公民館」を目指している。一人一



60年続く伝統の風あげ大会
ティラノサウルスの着ぐるみも参加し盛り上げます

人のがんばりが大切であり、ワンチームとしての取り組みが新たな感動を生んでいる。強力なリーダーがいるのではなく、一人が突出しているのでもなく、「ひとりの百歩ではなく、100人の一歩」を大切に、これからは住民が主役で、住民が笑顔になれるまちづくりを「ひとつの目的」に、職員、役員が丸となって進んでいく。とよまの地域づくりは、小さな一歩をスタートさせればかりだ。

(登米市登米公民館 館長 川谷清一)